論　文

乙種本「華夷訳語」韃靼館雑字における モンゴル文語の特徴

Characteristics of Written Mongolian of the *Hua-yi yi-yu* of the Yong-le era, in the Ming Dynasty

栗　林　　均
（東北大学）
KURIBAYASHI Hitoshi
（Tohoku University）

キーワード：華夷訳語、韃靼館雑字、モンゴル文語、漢字音訳、モンゴル文字
Keywords: the *Hua-yi yi-yu*, the *Sino-Mongolian vocabulary*, Written Mongolian, Chinese character, Mongolian script

目　次

1. はじめに
2. 甲種本「華夷訳語」と乙種本「韃靼館雑字」の関係
3.「韃靼館雑字」におけるモンゴル文字の字形の特徴
4.「韃靼館雑字」におけるモンゴル文語の綴りの特徴
5. 小結

1. はじめに

本稿の目的はいわゆる乙種本「華夷訳語」の「韃靼館雑字」に収録されているモンゴル文語の特徴を明らかにするとともに、モンゴル語史におけるこのモンゴル文語資料の評価を行うことである。

明の洪武 22 年（1389 年）、官吏のモンゴル語学習のために漢語とモンゴル語の対訳語彙集と文例集が「華夷訳語」として木版本で公刊され、その後もこれに倣って他の周辺諸国の言語についても対訳語彙集と文例集が編纂され、「華夷訳語」の名称を踏襲した。このように「華夷訳語」は明朝と清朝で周辺諸国との通信や使節の接受に携わる官吏の外国語学習のために編纂された漢語と外国語との対訳語彙集と文例集であり、時代的にも内容的にも異なる 4 種類が知られている。これら

を区別するため、洪武 22 年（1389 年）刊行の「華夷訳語」を「甲種本」と呼び、その後に編纂された 3 種類の「華夷訳語」を順に「乙種本」「丙種本」「丁種本」と呼んでいる[1]。

「華夷訳語」の乙種本は、明の永楽 5 年（1407 年）、中国周辺からもたらされる外国語の文書を翻訳するために設置された四夷館において編纂された漢語と諸外国語との対訳語彙集および文例集である。四夷館の設立時には、韃靼（モンゴル）、女真、西番（チベット）、西天（サンスクリット）、回回（ペルシャ）、百夷（タイ）、高昌（ウイグル）、緬甸（ビルマ）の 8 館が置かれ、その後、タイ語系の八百館と暹羅館が増設された。「華夷訳語」乙種本にはこれらの言語の諸本があり、さらに後に増補・追加された「續添」「續増」「新増」等と題する別冊も存在する。「華夷訳語」では、漢語と外国語との対訳語彙集を「雑字」と呼び、外国から中国の朝廷に寄せられた漢語の上奏文と外国語との対訳を「来文」と呼んでいる。乙種本では、「雑字」は漢語に対応する外国語の単語の発音を漢字で表記する「漢字音訳」とともに、その言語の文字による表記が付されている。「来文」では漢文と外国語の文字で書かれた文章が頁ごとに対置されている。

本稿で扱うのは、乙種本「華夷訳語」のうち「韃靼館雑字」と呼ばれる漢語とモンゴル語との対訳語彙集である。乙種本「華夷訳語」の「韃靼館雑字」では、漢語の単語に対して、漢字によるモンゴル語の発音表記（漢字音訳）とモンゴル文字による表記が合わさってひとつの項目を構成している。収録されている項目は「天文門」「地理門」「時令門」「花木門」「鳥獣門」等、17 の意味部門に分類され、項目数は都合 845 を数える。

乙種本の「韃靼館訳語（雑字と来文）」には、パリ・アジア協会所蔵本、ベルリン国立図書館所蔵本、中国国家図書館所蔵本、および東洋文庫所蔵本の 4 種類の写本が知られている。本稿では、パリ・アジア協会所蔵本を「A 本」、ベルリン国立図書館所蔵本を「B 本」、中国国家図書館所蔵本を「C 本」、東洋文庫所蔵本を「T 本」と略称する。以下、断りのない場合は、これら 4 本に共通している特徴である。

2. 甲種本「華夷訳語」と乙種本「韃靼館雑字」の関係

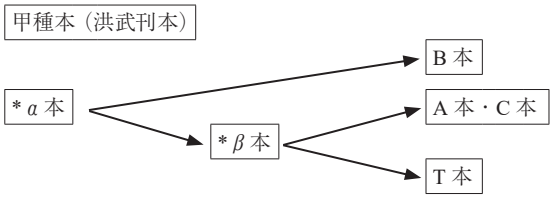
乙種本「華夷訳語」の「韃靼館雑字」は、甲種本の対訳語彙集と同じ部門をもち、基本的に同じ項目から成っている。「韃靼館雑字」の最後の項目（「終了」）は甲種本には含まれていないが、これを除けば 17 の部門の数と種類も、そこに含まれる 844 項目の種類と配列の順序も同じである[2]。甲種本「華夷訳語」の対訳語彙集と乙種本「韃靼館雑字」の主要な違いは、漢字でモンゴル語の発音を表記する方式が乙種本で簡略化されている（後述）ことと、「韃靼館雑字」には甲種本に無いモンゴル文字による表記が付されていることである。

栗林［2019: 7–12］は、甲種本と乙種本の 4 種類の異本の漢字表記の異同を比較して、それらの

1　これら「華夷訳語」の種類とそれぞれの特徴については、栗林［2019: 1–2］を参照。

2　これら 17 の部門の種類と 844 の項目については、栗林［2019: 3, 56–111］を参照。最後の 1 項目（漢語の「終了」）は、元来、語彙集がそこで終わったことを示していたが、それにモンゴル語の訳語が付されて独立した項目として扱われるようになったものであろう。

系統関係を次のような図にまとめている[3]。



図で *α 本は乙種本の 4 種類の異本の原本とみなされるもので、甲種本に対しては異本の関係にあると推定される。*β 本は A 本・C 本・T 本の原本として推定されるものである。

乙種本における漢語およびモンゴル語の漢字音訳表記には甲種本と共通な部分が多く、両者の類似の程度は極めて大きい。両者の最も顕著な違いは、モンゴル語の漢字音訳表記に関するもので、甲種本では漢字音に無いモンゴル語の音を表わす符号として「中」「舌」「丁」「勒」「黒」「克」「惕」といった普通の漢字よりひと回り小さい漢字（「小字」と呼ぶ）が用いられているのに対して、乙種本にはそれらが無いことである。「小字」は、乙種本では一部は省略され、一部は普通の字と同じ大きさで残されている。この特徴も含めて、甲種本と乙種本の漢字音訳表記は極めて緊密に対応しており、そこには一定の方式が適用されているのを認めることができる。

本稿は、乙種本のモンゴル文字の表記の特徴を検討しようとするものであるが、モンゴル文字の綴りは漢字によるモンゴル語の音訳表記と深く関係していると考えられるので、栗林［2019: 7］によりつつ甲種本と乙種本の漢字音訳表記の違いと対応について確認しておきたい。
（以下の例の中で左端の「番号」は語彙集の項目の通し番号で、甲種本と乙種本に共通である[4]。）

1. 甲種本で漢字の左に添えられる小字「中」「舌」「丁」は乙種本では表記されない。甲種本の「中」は漢字音にない声母（音節頭子音）［q］を表し、「舌」は声母［r］を表し、「丁」は韻尾（音節末子音）が［l］であることを表している。例：

番号	漢語	甲種本	ローマ字転写形	乙種本	
13	雨	中忽舌剌	qura	忽剌	
61	冬	兀丁奔	übül	兀奔	
378	金	丁安壇	altan	安壇	等。

2. 甲種本の「中合」（[qa]）は乙種本では「哈」で表記されている。例：

番号	漢語	甲種本	ローマ字転写形	乙種本	
416	兄	阿中合	aqa	阿哈	
135	猪	中合中孩	qaqai	哈孩	等。

3　一部簡略化した。*印は、推定される異本を表す。
4　Haenisch［1957］に付されている通し番号は、635 ～ 665、845 が間違っている。

3. 甲種本で漢字の右下に添えられてモンゴル語の音節末音を表す「勒」「黒」「克」「惕」「卜」等は、乙種本では他の漢字と同じ大きさで書かれている。例：

番号	漢語	甲種本	ローマ字転写形	乙種本	
29	泉	不剌黒	bulaq	不剌黒	
137	犢	土中忽勒	tuqul	土忽勒	
358	焼餅	兀惕篎克	ütmek	兀惕篎克	
770	是	拙卜	jöb	拙卜	等。

4.「小字」以外は、甲種本の表記がそのまま乙種本で踏襲されていることが多い。例：

番号	漢語	甲種本	ローマ字転写形	乙種本	
6	雲	額兀連	e’ülen	額兀連	
50	口子	阿馬撒児	amasar	阿馬撒兒	
149	象	札安	ja’an	札安	
236	宮	斡耳朶格児	ordo ger	斡耳朶格兒	
413	姨	納哈出額格赤	naqaču egeči	納哈出額格赤	等。

このように「韃靼館雑字」の漢字音訳表記は、多くの部分が甲種本の表記を継承している。

これに対して、モンゴル文字表記は甲種本には無く、「韃靼館雑字」で新たに付け加えられたものである。「韃靼館雑字」の成立年代を詳細に特定することはできないが、永楽 5 年（1407 年）に四夷館が設置された時には韃靼館が含まれていたことから、四夷館の設置時からさほど遠くない時期に編纂されたものと推定することができる。つまり、「韃靼館雑字」に記されているモンゴル文語は 15 世紀前半のかなり早い時期に由来するとみなすことに無理はないであろう。

3.「韃靼館雑字」におけるモンゴル文字の字形の特徴

「韃靼館雑字」におけるモンゴル文字の字形は、14 世紀に属する漢蒙対訳碑文、モンゴル語古訳本『孝経』における表記と類似している部分が多い。ここでは、現代のモンゴル族が使用しているモンゴル文字と異なる字形を中心に、その特徴を示すことにする。

以下に字形の実例として原本の影印を示すが、特に断りの無い場合はベルリン国立図書館所蔵本（B 本）を用いる。原本における各項目は、中央に漢語が置かれ、その左側に漢字でモンゴル語の発音を写した漢字音訳表記、右側にモンゴル文字による表記が配されている。例には、モンゴル文字のローマ字転写を示し、括弧内に項目の通し番号を付す。

3–1. 母音字 <a> <e>、および子音字 <n> <d> の末位形の最後の字画は、垂直の線で描かれている[5]。

sara（3）　ende（828）　on（63）　qitad（451）

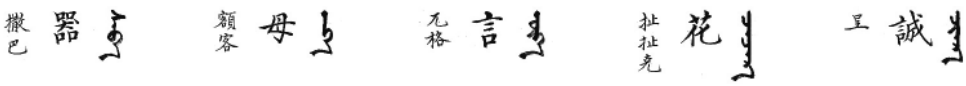
少数であるが、子音字 <n> にはスペースの関係で右横にのびる字形も見られる。

degel-ün ǰaq_a（332）　tngri-yin o*yalar（19）[6]　siraqasan miq_a（360）

これらは 13、14 世紀のモンゴル文語に多く見られる字形である。それに対して、次に示す字形は「韃靼館雑字」に特徴的なものとみなすことができる。

語末の <ba> <be> <ke> <ge> の母音字 <a> <e>、および語末の子音字 <g> <ng> は、最後の字画が左にほぼ水平にのびる線で描かれている。

saba（300）　eke（411）　üge（510）　čečeg（95）　čing（566）

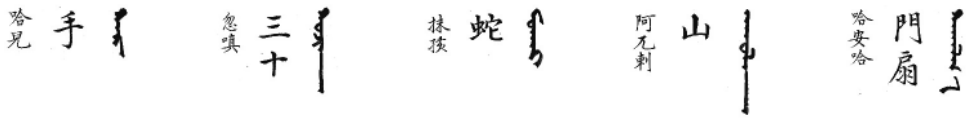


語中スペースの後の母音字 <a> <e> は、左にほぼ水平にのびる線で描かれている[7]。

miq_a（720）　qur_a（13）　büs_e（336）　bey_e（669）　tan_a（383）

3–2. 子音字 <γ> は、全ての位置で点の無い字形が用いられている。点の付いた字形は現れない。

γar（693）　γučin（645）　moγai（171）　aγula（22）　qaγalγ_a（238）



---

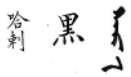
5 「末位形」は語末あるいは語幹末でスペースの直前に位置する字形を指す。

6 ローマ字転写の o* は、母音字 <o> が、女性母音字 <ö> の字形と同形になっていることを表す。

7 「語中スペース」はひとつの単語が分けて綴られる時に単語の内部に置かれるスペースを指す。ローマ字転写では「 _ 」（アンダースコア）で語中スペースを表す。

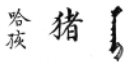
これにより、子音字 <γ> と <q> は同形となっており、字形の上で区別することができない。

qar_a（621）

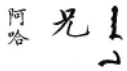


qaγan（391）

γaqai（135）

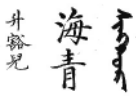


aq_a（416）



なお、子音字 <ng> <b> の直後に書かれる <q> <γ> の中位形は頭位形と同じ字形になっている[8]。子音字 <ng> <b> の直後にあっても、<q> <γ> の後にスペースがある場合は longq_a（282）の例に見るように末位形となっている（次頁の字形の表を参照）。

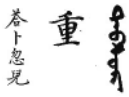
singqor（205）



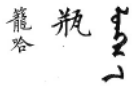
ongγud（459）

mingγan（653）

dabqur（668）



longq_a（282）

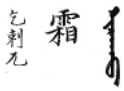


漢字音訳表記でも、子音 q と γ は区別されない。ローマ字転写では、後の時代のモンゴル文語の表記や、現代語の発音との対応に基づいて子音字の <γ> と <q> を区別している。

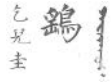
3–3. 先古典期モンゴル文語の表記上の特徴のひとつに、男性母音字（<a> <o> <u>）を含む単語の中で母音字 <i> が子音字 <q> <γ> と連なって <qi> <γi> という綴り―（語頭）（語中）―が存在することがある[9]。古典期以降、母音字 <i> は、男性母音字を含む単語でも子音字 <k> <g> と結合して <ki> <gi> ―（語頭、語中）（語末）―と綴られることが多い。

「韃靼館雑字」では、男性母音字（<a><o><u>）を含む単語の中で子音字 <q> が母音字 <i> と結合した <qi> という綴りが次のように 7 例見られる。

qiraγu（8）



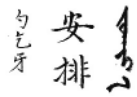
qirγui（191 T 本）[10]



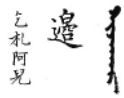
qitarčiγan（203）

qitad（451）

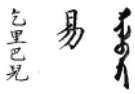
ǰoqiy_a=（599）[11]



qiǰaγar（759）



qilbar（763）



---

8 「頭位形」は語頭に書かれる字形、「中位形」は語中に書かれる字形を指す。

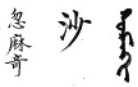
9 <qi> と <γi> のモンゴル文字による表記は同じである。

10 A 本 C 本 T 本で qirγui、B 本では kirγui.

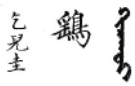
11 ローマ字転写の「=」は、動詞の語幹と語尾との境界を表す。動詞の語幹末、動詞の語幹と活用語尾の境界、動詞活用語尾の先頭に置く。

その一方で、男性母音字を含む単語でも <ki>（5 例）、<gi>（7 例）という綴りが見られる。

qumaki（28）



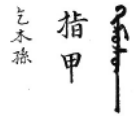
kirγui（191 B 本）



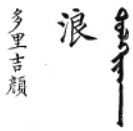
takiy_a（193）

kilingla=n（551）

kimusun（697）

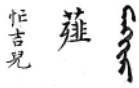


dolgiyan（40）



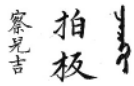
songgin_a（109）

manggir（111）



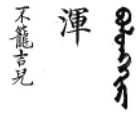
anggir（195）

čargi（320）



aγusigi（702）

bulunggir（797）



このように、「韃靼館雑字」では男性母音字を含む単語の中で <qi>（<γi>）という綴りが見られるが、同時に <ki> <gi> という綴りも用いられており、両種の綴りが混在している。

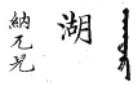
子音字 <q> <γ> <k> <g> の字形

文　字	頭位形	中位形	末位形
<q>		（1） （2）	
<γ>			
<k>			
<g>			

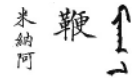
<q> <γ> の中位形のうち（1）の字形は <ng> と <b> 以外の文字の後に書かれ、（2）の字形は子音字 <ng> と <b> の直後に書かれる。（2）の字形は頭位形と同形である。

3–4. 子音字 <n> は、全ての位置で点の無い字形が用いられている。点の付いた字形は現れない。

naγur（25）



minaγ_a（261）

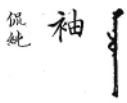


tan_a（383）

unuγan（131）

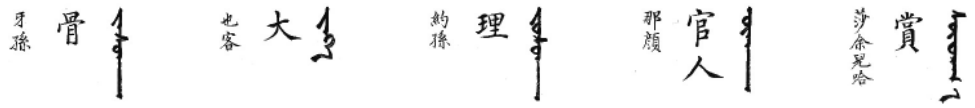
qonin（133）

qančun（333）



3–5. 子音字 <y> は頭位形と中位形で、ななめ直線の字形（ᠶ）が用いられている。先端がはねあがっている（カギのある）字形は現れない。

yasun（718）　yeke（778）　yosun（724）　noyan（393）　soyurq_a=（555）



子音字 <y> と <ǰ> の頭位形は同形となり、字形の上で区別することができない。

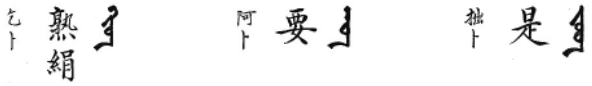
ǰaγan（149）　ǰegün（756）　ǰiran（648）　ǰočin（402）

3–6. 子音字 <ǰ> と <č> の中位形は同形であり、字形の上で区別することができない。

büči（334）　küǰi（632）　qačar（674）　γaǰar（20）　üčügen（779）　üǰügür（760）

3–7. 子音字 <b> の末位形には ᠪ の字形が用いられている。

kib（345）　ab=（586）　ǰö*b（770）[12]



3–8. 子音字 <s> の末位形は ᠰ の字形である。これに対して、子音字 <š> の末位形は ᡷ の字形となっている。前者は音訳漢字の「思」に対応しており、後者は音訳漢字の「失」「食」「石」「絲」「式」に対応している。このような子音字 <s> と <š> の末位形の書き分けはこれまで報告されていないが、「韃靼館雑字」では明確にこれらの書き分けが行われている。

ulus（52）　bars（121）　ǰoγos（387）　tegüs（820）

12　ローマ字転写の ö* は、母音字 <ö> が、男性母音字 <o> の字形と同形になっていることを表す。

ǰimiš（91）　miš（147）　kerbiš（245）[13]　böš（349）　qaš（381）　qoš（661）

なお、子音字 <s> と <š> の頭位形と中位形は同じ字形である。右の語では、音訳漢字（「書連（*shu-lien*）」）により語頭の子音は š であることが分かるが、モンゴル文字では子音字 <s> と同じ字形で書かれている。これは 13、14 世紀のモンゴル文語の字形の特徴のひとつに数えられる。

šülen（353）

3–9. モンゴル文字では一般に子音字の <d> と <t> は同形であり、字形の上で区別することができない[14]。「韃靼館雑字」では、子音の d と t は漢字音訳で書き分けられているが、モンゴル文字では区別されていない。モンゴル文字の子音字 <d> と <t> には表のように 2 種類の字形があり、それらは語中の位置により、あるいは慣習的に使い分けられている。

子音字 <d> と <t> の字形

文　字	頭位形	中位形	末位形
<t>			
<d>			

3–9–1. 語頭位置では の字形が書かれている。<d> と <t> を字形で区別することはできない。

dalan（649）　der_e（314）　dulaγan（73）　tabun（638）　tende（829）　tuγul（137）

子音字 <d> と <t> の中位形と末位形には、それぞれ 2 種類の字形があるが、文字と字形は 1 対 1 で対応していない。子音字 <d> と <t> がどの位置でどの字形となるかについて、厳密な規則を導き出すことは困難であるが、以下に見るように大きな傾向があることを指摘することができる。

3–9–2. 語末に現れる子音字 <d> は B 本で 2 例が の字形で、他の 9 例は の字形である。

B 本で語末に の字形をもつ単語は「772　實　馬哈惕　maγad’」と「365　乾酪　忽魯惕　qurud’」の 2 語である（語末位置で の字形を取る子音字 <d> を d’ とローマ字転写する）。これらのうち qurud’（365）は、B 本にのみ見られる形で、A 本 C 本 T 本では、quruda と誤った形が書か

13　影印は T 本のもので、A 本 C 本も同じ。B 本では kerbisi と、語末に母音が付いた形となっている。

14　18 世紀のモンゴル語古典文法書 “ǰirüken-ü tolta-yin tayilburi（oγtarγui-yin mani）” では子音字の <d> と <t> を（さらに子音字の <g> と <k> も）字形の上で区別しているが、普及しなかった。

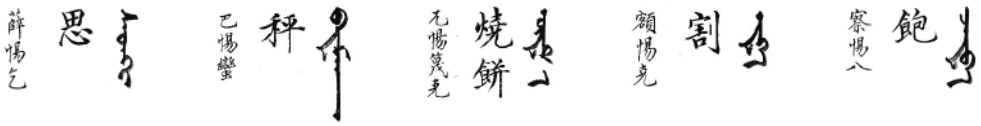
れている。子音字 <t> は語末位置には現れない。

maγad’（772）　qurud’（365）　bürügüd（185）　kebid（246）　su*bud（382）[15]

この他、語末の の字形は、「451　漢人　乞塔惕　qitad」「459　神　汪昆惕　ongγud」「496　想都剌惕　durad=」「523　跪　莎葛惕　sögöd=」「530　作事　委列惕　üiled=」「575　敲　迭列惕　deled=」といった語で用いられている。「韃靼館訳語」では語末位置に の字形も の字形も使われているが、 の方がより多く使われている一般的な字形であるとみなすことができる。

3–9–3. 語中の子音字の前では、sedki= という単語で の字形が書かれ、それ以外では の字形が用いられている（子音字の直前で の字形を取る子音字 <d> を d’ とローマ字転写する）。

sedki=（497）　bad’man（315）　üd’m_e（358）　ed’ke=（374）　čad’=ba（377）



čid’kör（458）　tö*rid’ke=（501）　ted’kü=（580）　yegüd’ke=（602）

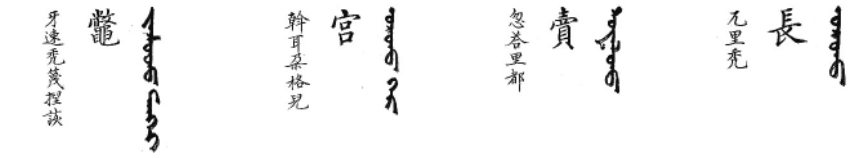
この書き分けは、モンゴル語古訳本『孝経』においても見られる。そこでは語中の子音字の直前の位置において、動詞 sedki= の活用形および派生語では を用い，それ以外の位置では を用いるという書き分けが行われていた[16]。

3–9–4. 語中の母音字の前では、多くの場合 の字形が用いられている。子音字 <d> と <t> が母音字の前で の字形となるのは、次の 4 例だけである（母音字の直前に書かれて の字形をもつ子音字 <d> <t> をそれぞれ d’ t’ とローマ字転写する。）：

15　ローマ字転写の u* は、母音字 <u> が、女性母音字 <ü> の字形と同形になっていることを表す。

16　栗林［1997］274–275 頁。

yasut’u menekei（182）　ord’o ger（236）　qudald’u=（596）　urt’u（784）



これらの語に共通しているのは、子音字 <d> と <t> が、語末の円唇母音字（ここでは <o> と <u>）の直前に位置していることである。モンゴル語古訳本『孝経』においては、この特徴が顕著に認められる。『孝経』では、語末の᠊の直前には᠊の字形が書かれ，その他の位置では᠊の字形が書かれるという書き分けが行われていた[17]。しかし「韃靼館雑字」ではこの書き分けは徹底しておらず、次の 4 語では子音字 <d> と <t> が語末の᠊の直前で᠊の字形で書かれている。

uγtu=（481）　situ=（572）　eyetüldü=（598）　kündü（782）

要するに、「韃靼館雑字」における子音字 <d> と <t> の字形の書き分けに関しては、モンゴル語古訳本『孝経』に見られる書き分けと同様の傾向が認められるものの、それは徹底されていたものではなく、一部の単語で慣習的に保持されていたとみなすのが適切と思われる。

3–10. A 本、C 本、T 本では、語頭に現れる母音字 <e> の字形（ačuγ）がほとんど識別できないことがある。これは、子音字 <č> <j> <d> の直前で顕著である。B 本ではこれらの位置で ačuγ がはっきりと認められる。以下に T 本と B 本の表記を対照して示す。

eǰen（404 T 本）　（B 本）　ečenggü（809 T 本）　（B 本）

edöge（81 T 本）　（B 本）　eǰege kür=tele（833 T 本）　（B 本）

17　栗林［1997］275–277 頁。

3–11. モンゴル語の表記では、ひとつの単語を構成する複数の文字は基本的に連続して（ひと綴りで）綴られるが、母音字の <a> と <e> が語末にある場合、先行する部分から離して書かれることが多い。しかし、語末の母音字 <a> と <e> はすべて先行する文字から離して書かれる訳ではなく、それらが離して書かれるか連ねて書かれるかは、先行する文字の種類により、また単語によって決まっている。その決まりも時代や文献によって一様でない。

「韃靼館雑字」では、語末の母音字 <a> と <e> は、子音字 <γ> <q> <r> <n> <m> <s> <y> <l> の後で離して書かれていることが多く、それ以外の子音字の後では連ねて綴られている。

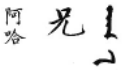
語末の母音字 <a> <e> が先行する子音字から離して書かれる状況は次の通りである：

3–11–1. 直前の子音字が <γ>（26 例）<q>（19 例）<n>（15 例）<m>（7 例）<s>（5 例）<y>（8 例）の場合は、すべて離して書かれており、例外は無い。動詞の語幹（＝命令形）でも同様である。

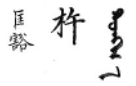
solongγ_a（15）

abaγ_a（410）

aq_a（415）



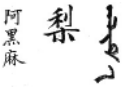
qongq_a（307）



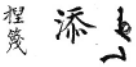
qoyin_a（755）

san_a=（583）

alim_a（90）

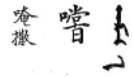


nem_e=（486）

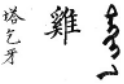


laus_a（129）

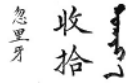
ams_a=（371）



takiy_a（193）



quriy_a=（606）



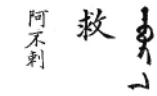
3–11–2. 直前の子音字が <r> の場合（全 24 例）、1 例（sara）のみ連ねて書かれ、他の 23 例はすべて離して書かれている。

sara（3）

dotor_a（752）

er_e kümün（436）

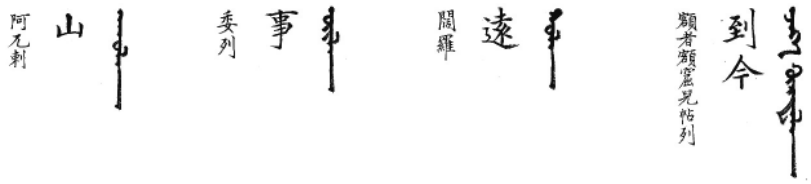
abur_a=（582）



sara「月」は、13、14 世紀のモンゴル文語資料にも見られる形で、伝統的に保持されている綴りとみなすことができる。

3–11–3. 直前の子音字が <l> の場合（全 10 例）、次の 4 語で連ねて書かれている：

aγula（22）　üile（538）　qola（786）　eǰege kür=tele（833）



他の 6 語では離して書かれている：

ǰul_a（294）　könǰil_e（339）　ötörl_e=（489）　daγul_a=（511）　qadaγal_a=（589）　u*l_a（713）

モンゴル語古訳本『孝経』でも、üile、qola、および副動詞語尾 =tala/=tele の語末の母音字は連ねて書かれていることから[18]、これらの語では語末の母音字 <a> <e> が連ねて書かれる綴りが伝統的に保持されているとみなすことができる。

3–11–4. 一方で、語末の母音字 <a> <e> に先行する文字が上記以外の子音字（<t> <d> <č> <ǰ> <b> <g> <k>）の場合には、母音字 <a> <e> はそれらの子音字に連ねて書かれている。例：

aγta（126）　ǰida（263）　arča（83）　baǰa（475）

bara=ba（818）　beke（303）　ečige（408）

4.「韃靼館雑字」におけるモンゴル文語の綴りの特徴

4–1. モンゴル文字で綴るモンゴル文語は 13 世紀にモンゴル人が書き言葉として採用したものである。モンゴル文字は表音文字であり、その綴りにはモンゴル文語成立当時のモンゴル語の発音が反映されていると考えられるが、その一方で、当時の口語の発音とは必ずしも合致せず書き言葉として慣習的に用いられている綴りも一部に見られる。

---

18 『孝経』には üile（2b1 他）、qola（35a4）、kür=tele（13b3）等がある（栗林［2014］）。

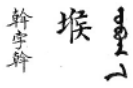
「韃靼館雑字」にも、モンゴル文語で慣習的に引き継がれてきた伝統的な綴りをもつ語が見られる。「韃靼館雑字」の最初の項目は、「天文門」の「天」で、左の影印に見るように漢字音訳は「騰吉里（tenggili）」、モンゴル文字表記はローマ字転写で tngri となっている。漢字音訳の「騰吉里（tenggili）」はモンゴル語の発音を写しているが、モンゴル文字の tngri は 13 世紀以来の固定化した伝統的な綴りで、現代にも引き継がれている。これは、当時の発音と合致しない書き言葉としてのモンゴル文語の綴りの典型的な事例である。

tngri（1）

「韃靼館雑字」の中には、他にも次のように漢字音訳形と合致しないモンゴル文語形が見られるが、これらはモンゴル文語の中で慣習的に用いられていた綴りとみなすことができる。

番号	漢語	漢字音訳（ローマ字転写）	モンゴル文語ローマ字転写
57	堠	斡孛斡（obo’o）	oboγ_a
251	開	你額（ni’e）	nege=
395	人	古温（gu’un）	kümün
533	去	約兒赤（yorči）	erči=
549	生受	勺孛郎（ǰobolang）	ǰobalang
618	青	闊闊（koko）	köke
639	六	只兒瓦安（ǰirwa’an）	ǰirγuγan
750	下	朶剌（dola）	door_a

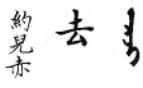
oboγ_a（57）



nege=（251）

kümün（395）

erči=（533）

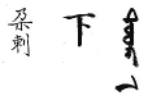


ǰobalang（549）

köke（618）

ǰirγuγan（639）

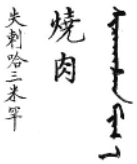
door_a（750）



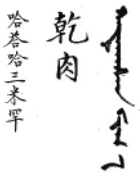
しかし、「韃靼館雑字」にはモンゴル文語の伝統的な綴りからはずれて、漢字音訳の表記を忠実に再現しているとみられる綴りもまた存在する。

右の例は「焼いた肉」と「干した肉」の意で、モンゴル語では動詞 sira=（焼く）の完了形 sira=γsan（焼いた）と qada=（干す）[19] の完了形 qada=γsan（干した）がそれぞれ miq_a（肉）を修飾している形とみなされる。ところが漢字音訳形は「失剌哈三

siraqasan miq_a（360）



qadaqasan miq_a（361）



19　ローマ字転写形 qada= は漢字音訳に依っている。現代語の発音は［xatăx］（『蒙漢詞典』574 頁上段）。

（šilahasan）」と「哈荅哈三（hadahasan）」であり、モンゴル文字ではそれぞれ siraqasan（あるいは siraγasan）、qadaqasan（あるいは qadaγasan）と綴られている。一見しただけでは気付きにくいが、動詞語幹の後の完了形語尾に当たる綴りが γsan ではなく、qasan（あるいは γasan）となっている。このような綴りは、モンゴル文語の知識によったものではなく、漢字音訳表記をそのままモンゴル文字で写したことは明らかである[20]。

右の語では、漢語「犂」に対するモンゴル語の訳語として、漢字音訳では「安札孫（anǰasun）」、モンゴル文字では alǰasun という形が付されている。漢字音訳形の anǰasun という形は、モンゴル諸言語・方言の形とも合致している。つまりモンゴル語の諸方言を見ると、第 1 音節の音節末の子音は n であり、l をもつものは無い[21]。「安札孫」の「安」がモンゴル文字でなぜ al と写されたのか、それは甲種本にあった小字「$_{\text{T}}$」を乙種本で表記していないことと関係している。右の語では漢語の「金」に対して、モンゴル語の漢字音訳では「安壇（antan）」、モンゴル文字では altan と書かれている。甲種本では、この語の漢字音訳形は「$_{\text{T}}$安壇（altan）」であり、「$_{\text{T}}$安」で al を表していた。乙種本では「小字」を表記していないために an も al も「安」となっている。「安壇（金）」の「安」を al で写したように、「安札孫（犂）」の「安」も al と誤って類推してモンゴル文字で alǰasun としたものであろう。

alǰasun（277）

altan（378）

4–2.「韃靼館雑字」には語頭の母音字 <e> が母音字 <a> の頭位形と同形の（2 個の ačuγ）で書かれているものが 2 例ある（これを e* と転写する）。

それら 2 例のうち e*m は A 本 C 本 T 本にみられ、B 本では の字形（1 個の ačuγ）で書かれている。e*ngke はすべての異本に共通の形である。

e*m（T 本 369）

e*ngke（834）

13、14 世紀のモンゴル文語の文献には、母音字の <e> が という字形で書かれている例が散見されることから、「韃靼館雑字」においてもこうした表記法が引き継がれているのではないかという見方もありそうに思われる。しかし、これに関係する「韃靼館雑字」における例がこの 2 語だけで、それらの音訳漢字が「諳（*am*）」と「昂（‘*ang*）」であることに注目すれば、モンゴル文字の表記に漢字音が関係しているのではないかという疑いが生じる。栗林［2019: 22–25］は、甲種本における「音訳漢字の代替使用」の中で、漢字音に無いモンゴル語の音節を表している漢字の代替使用の実例を 23 例指摘している。「諳」と「昂客」という表記に関しても、モンゴル語の em および eng という音節に相当する漢字がなかったことから、それに近い音をもつ「諳（*am*）」と「昂（‘*ang*）」の字が使われたものである[22]。「韃靼館雑字」では、甲種本の表記がそのまま引き継がれて、モンゴル文字では漢字音をそのまま写して am, angke と綴ったものと考えられる。B 本の em の表

20　甲種本の表記は「失剌^{中}合三」と「哈荅^{中}合三」である。「^{中}合三」という漢字音訳表記が、形動詞完了形の語尾（モンゴル文語の =γsan）を表している例は、他にも甲種本の文例の部に 4 例見い出される。栗林［2019: 21］は、「^{中}合」がかつて音節末音の q を表すのに使われていたと推定している。

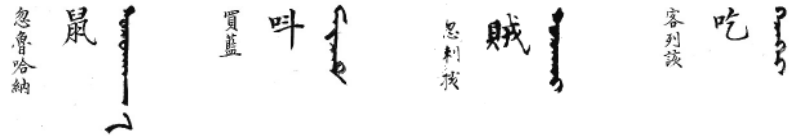
21　孫竹［1990: 113］

22　栗林［2019: 22–23］。

記は、本来のモンゴル文語の綴りに訂正したものであろう。

4–3.「韃靼館雑字」には、モンゴル文字表記の語で子音字 <l> とあるべき所が間違って <r> と表記されているものが 4 例みられる。

quruγan_a（161）　maira=m（234）　quraγai（476 C 本）　keregei（733）



甲種本の漢字音訳では、声母（音節頭子音）に子音 l をもつ漢字に小字「舌」をつけることによってモンゴル語の音節頭子音 r を表している。乙種本では「小字」が表記されないので、音節頭の子音 l も r も同じ表記になっている。上に挙げた「忽魯哈納（huluhana）」の「魯（lu）」、「買藍（mailam）」の「藍（lam）」、「忽剌孩（hulahai）」の「剌（la）」、「客列該（kelegai）」の「列（le）」はモンゴル語の子音 l と r のいずれを表しているか表記では区別することができない。「韃靼館雑字」の編者はこれらが子音 r を表していると考えてモンゴル文字 <r> で写したものと考えられる。

これらの語のモンゴル文字表記は、乙種本の異本によって異同がある。以下の例では、モンゴル文字表記のローマ字転写の後に、カッコに入れて異本の種類を示した。

番号	漢語	漢字音訳	モンゴル文字表記のローマ字転写
161	鼠	忽魯哈納（huluhana）	quruγan_a（B）quluγan_a（A C T）
234	叫	買藍（mailam）	mairam（A B C T）
476	賊	忽剌孩（hulahai）	quraγai（A C）qulaγai（B T）
733	吃	客列該（kelegai）	keregei（B）kelegei（A C T）

このような違いが生じた原因は、おそらくおおもとのモンゴル語表記が間違っており、写本を製作する際に間違いに気が付いて、それぞれの異本で子音字 <l> に正したものと考えられる。

4–4. 甲種本「華夷訳語」や「元朝秘史」の漢字音訳モンゴル語や、パスパ文字モンゴル語の資料の中には、語頭に無声摩擦喉子音 h をもつ一連の単語が見られるが、13、14 世紀のモンゴル文語では当該の子音を表す文字はなく、それらは母音字で始まる語として綴られている。「韃靼館雑字」は、この点に関しても甲種本とほぼ同じ漢字音訳表記となっている。ただし、甲種本で語頭に h 音が表記され、乙種本でそれが表記されていないものが 3 語ある：

番号	漢語	甲種本	乙種本
132	牛	忽格兒（huger）	兀格兒（uger）
169	蜘蛛	哈阿里真（ha’alijin）	阿哈里真（ahalijin）
604	報恩	哈赤中合舌里［丁］温（hači qari’ul）	阿赤哈里温（ači hali’un）

これらのうち、「蜘蛛」の訳語では、甲種本の「哈阿里真」はむしろ「阿哈里真」の誤記である可能性が否定できない。語頭に喉子音 h をもつ他の文献や、モンゴル系諸言語の対応を見ても、この単語の語頭に喉子音 h があったかどうか確かな根拠を得ることはできないからである。乙種本で漢語「牛」と「報恩」に対する漢字音訳モンゴル語の語頭で喉子音が表記されていないのは、「韃靼館雑字」の編集時に参考にしたモンゴル語の口語（方言）の特徴を反映したものであろうか。

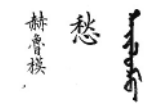
「韃靼館雑字」には、漢字音訳表記で語頭に喉子音 h をもつ単語が 32 例ある。
（以下に掲げる例では、「通し番号」「漢語」「漢字音訳形」「ローマ字転写」の順に示す。甲種本の漢字音訳形が異なった表記をもつ場合は、それを［　］の中に示す。）

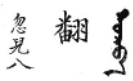
341　氊襪　豁亦抹孫［闊亦抹孫］（hoyimosun）【AC 本「闊亦抹孫」T 本「濶亦抹孫」】
347　線　忽荅孫（hudasun）
578　翻　忽兒八（hurba）
680　眉　哈泥思哈［哈泥思中合］（hanisha）
4　星　火敦（hodun）
23　林　槐（hoi）
87　柳　希扯孫（hičesun）
101　種子　許列［許舌列］（hule）
170　蛾　赫兒別該（herbegai）
291　囊　呼呼塔（huhuta）
539　送　許迭（hude）
544　嗔　孩抹思八（haimosba）
617　紅　忽剌安（hula’an）
682　髮　許孫（husun）
701　肝　黑里干（heligen）
761　底　喜魯阿兒［喜舌魯阿児］（hilu’ar）
791　狹　希兀壇（hi’utan）
540　愁　赫魯模（helumu）
590　拴　忽牙（huya）
684　唇　忽侖勒［忽舌侖勒］（hulu<n>l）
7　烟　忽紉（hunin）
63　年　桓（hon）
98　根　忽札兀兒（huǰa’ur）
141　狐　忽捏干（hunegan）
192　鳶　赫列額（hele’e）
448　牧牛人　忽格兒赤［忽格赤］（hugerči）
542　羞　喜扯（hiče）
616　恐嚇　哈阿黑藍［哈阿黒藍］（ha’aqlam）
643　十　哈兒班（harban）
695　掌　哈剌罕［哈剌中罕］（halahan）
747　西　呵羅捏（horone）
773　虚　豁黑脱兒忽［豁黒脱児忽］（hoqtorhu）

「韃靼館雑字」では、これらの単語に対するモンゴル文字表記として、一部の単語では語頭に子音字 <q> が書かれており、他の単語では母音字で始まる語として書かれている。

モンゴル文語の語頭に子音字 <q> が書かれているのは上の 32 例のうち、上記リストの先頭に列挙した次の 7 例である：（7 番目の例は、B 本では母音字で始まっている。）

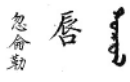
qoyimosun（341）

qayilumu（540）


qurba=（578）


quy_a=（590）

qanisq_a（680）

qurul（684）


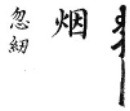
qudasun（347　ACT 本）

u*dasun（347　B 本）

漢字音訳の語頭の喉子音 h に対してモンゴル文字に対応する文字が無く、母音字で始まる語は、上記「u*dasun（347　B 本）」の他に、次の 25 語である。

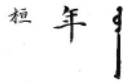
odun（4）

unin（7）



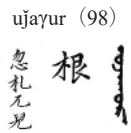
o*i（23）

on（63）

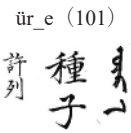


ičesün（87）

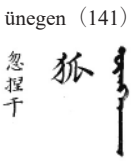
uǰaγur（98）



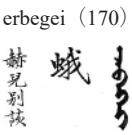
ür_e（101）



ünegen（141）



erbegei（170）



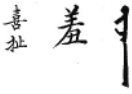
elege（192）

uγuta（291）

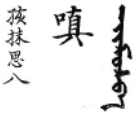
ükerči（448）

üde=（539）

iče=（542）

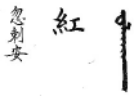


ayimos=ba（544）

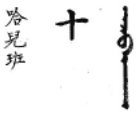


aγaγla=m（616）

ulaγan（617）



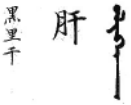
arban（643）



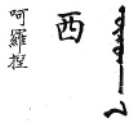
üsün（682）

alaγan（695）

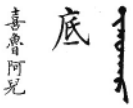
eligen（701）



örön_e（747）



iruγar（761）



oγtorγu（773）

igutan（791）

漢字音訳表記で語頭の喉子音 h に対応して、モンゴル文語で子音字の <q> が書かれているのは、他の文献に例を見ない極めて珍しい事例に数えられる。語頭の子音字 <q> は喉子音 h を写したものであろうか？もしそうだとしたら、なぜ先の 7 語だけがそのような表記となったのであろうか。

このようなモンゴル文字の表記は、実は口語の発音に基づいたものではなく、「韃靼館雑字」の漢字表記だけをたよりにモンゴル語を綴ったことによって生じた誤記と考えることができる。

甲種本の漢字音訳では、「617　紅　忽剌安（hula’an）」と「271　甲　中忽牙黑（quyaq）」の「忽（hu）」と「中忽（qu）」のように小字「中」の有無によって語頭の喉子音 h と q が区別されている。他方、乙種本では「小字」を表記しないため、漢字表記による違いが無い。上の例は乙種本では、「617　紅　忽剌安」と「271　甲　忽牙黑」で、いずれも「忽」と表記され、それが hu なのか qu なのか、漢字表記では区別することができない。モンゴル文字では、前者の喉子音（h）は表記されず、後者の子音（q）は子音字 <q> によって書かれていることが多い。先に挙げた 7 つの単語は、「韃靼館雑字」の編者が音訳漢字を頼りにモンゴル文語の綴りを間違った類推によって子音字 <q>

で写したものとみなすことができる。これは、前節でみたように、「韃靼館雑字」で小字「舌」を削除したことにより r で始まる音節と l で始まる音節が区別できないことによって生じた誤記のパターンとよく似ている。

4–5. モンゴル文語には、円唇母音を表す母音字が 4 種類ある。男性母音字の <o> <u> と女性母音字の <ö> <ü> である。しかし、字形の上では男性母音字の <o> と <u> は全く同じ形であり、女性母音字の <ö> と <ü> も全く同じ形である。それぞれの字形は、次のように示すことができる。

文　字	頭位形	中位形	末位形
<o> <u>（男性母音字）			
<ö> <ü>（女性母音字）		（1）　（2）	

<ö> <ü> の中位形のうち（1）の字形は第 1 音節に、（2）の字形はそれ以外の位置に書かれる。（2）の字形は <o> <u> の中位形と同形である。

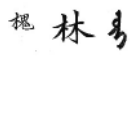
このように、男性円唇母音字と女性円唇母音字は、単語の第 1 音節でのみ字形の違いがある。

ところが、「韃靼館雑字」のモンゴル文字表記では単語の第 1 音節で男性母音字と女性母音字の字形が逆になっている表記が少なからず見られる。つまり、男性母音字が書かれるべき箇所に（語頭）または（語頭以外の第 1 音節）が書かれ、女性母音字が書かれるべき箇所に（語頭）または（語頭以外の第 1 音節）が書かれている語が少なくないのである。

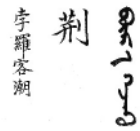
4–5–1. 男性母音字 <o> <u> が第 1 音節で（語頭）または（語頭以外の第 1 音節）の字形で書かれている語は 15 例ある（これらを o* u* とローマ字転写する）。

tngri-yin o*yalar（19）

o*i（23）



bo*r_a kečegü（88）

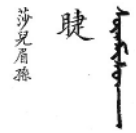


to*li（311）

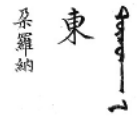
o*toči（398）

bo*r_a（627）

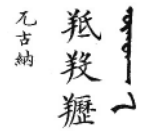
so*rmisun（681）



do*ron_a（745）



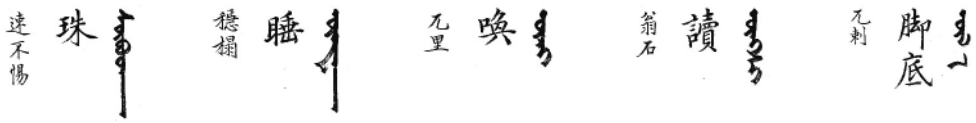
u*qun_a（165）



u*dasun（347）[23]

[23] B 本の字形。A 本 C 本 T 本では qudasun.

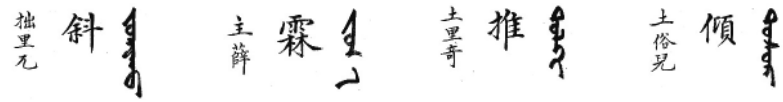
su*bud（382）　u*nta=（512）　u*ri=（514）　u*ngsi=（520）　u*l_a（713）



4–5–2. 他方、女性母音字 <ö> <ü> が第 1 音節で（語頭）または（語頭以外の第 1 音節）の字形で書かれている語は 11 例ある（これらを ö* ü* とローマ字転写する）。

mö*nggü（379）　dö*čin（646）　ö*lmi（712）　jö*b（770）

jö*riγu（795）　jü*s_e（12）　tü*lki=（576）　tü*sür=（581）



mü*rü（687）　jü*rüken（691）　dü*lei（732）

13、14 世紀の資料に記されているモンゴル文語には、これと同じように単語の第 1 音節の男性母音字 <o> <u> を（語頭）または（語頭以外の第 1 音節）で、また第 1 音節の女性母音字 <ö> <ü> を（語頭）または（語頭以外の第 1 音節）で書いている例が見られることがある[24]。

しかしながら、「韃靼館雑字」における男性母音字と女性母音字の混同は、13、14 世紀のそうしたモンゴル文語の表記の伝統を引き継ぐものではなく、むしろ漢字音訳表記の影響で生じた誤記である可能性が大きい。

甲種本『華夷訳語』、および『元朝秘史』におけるモンゴル語の漢字音訳では、2 種類の円唇母音を書き分けて区別している。たとえば、「兀」「不」「主」「木」「魯」「奴」「忽」「枯」「骨」等々の漢字は男性円唇母音の u および女性円唇母音の ü を含むいずれの音節を表記するのにも用いられ、これに対して「斡」「孛」「勺」「抹」「羅」「那」「豁」「闊」「果」等々の漢字は男性円唇母音の o および女性円唇母音の ö を含むいずれの音節を表記するのにも用いられており、これらの使い分けは一貫している。その一方で、甲種本『華夷訳語』および『元朝秘史』では、男性円唇母音 u を含む音節と女性円唇母音 ü を含む音節を同じ漢字で写しており、同様に男性円唇母音 o を含む音節

24　たとえば、モンゴル語古訳本『孝経』には bü*tümǰi（18b5）、čö*m（20a3）、jö*čin（19b4, 19b6）等が見られる（栗林［2014］）。

と女性円唇母音 ö を含む音節を同じ漢字で写していて、それらの違いは区別されない。この漢字音訳方式は乙種本にもそのまま引き継がれているので、「韃靼館雑字」の編者がモンゴル文字を表記する際に音訳漢字では区別しない男性円唇母音と女性円唇母音を間違って綴ったことは大いにありうる。つまり、それらは音訳漢字で区別されていない男性円唇母音と女性円唇母音を取り違えてモンゴル文字に写した誤記とみなすことができる。

5. 小結

乙種本「華夷訳語」の「韃靼館雑字」は、15 世紀前半の早い時期に由来するものと考えられる。そこには、漢語との対訳でモンゴル文語形の語彙 845 項目が収録されているだけでなく、すべての単語に対してモンゴル語の発音を漢字で表記した「漢字音訳形」が併記されている。いわば、発音表記付きのモンゴル文語資料と言うことができる。それは時代的にも、量的にも、また対訳語彙というジャンルとしても、そして発音表記を併せ持つという様式でも、他に類を見ないモンゴル文語資料である。

Tumurtogoo［2006］は、13 世紀から 16 世紀にかけての現存するモンゴル文語資料を蒐集してテキストのローマ字転写と単語索引に資料の影印を付して同時代のモンゴル文語の包括的な資料集として公刊したが、そこに「韃靼館雑字」のモンゴル文語資料は含まれていない。「韃靼館雑字」に関しては、利用できる影印や研究資料が少ない上に漢字を含む資料であることから扱い難いという側面もあるが、モンゴル文語資料の時代的、量的空白を埋める貴重な資料であることは疑いない。

「韃靼館雑字」に記されているモンゴル文字の字形は 14 世紀の漢蒙対訳碑文やモンゴル語古訳本『孝経』にみられる字形と共通している所が多く、典型的な「先古典期モンゴル文語」の字形とみなすことができる。モンゴル文語の単語の綴りに関しては、一部に tngri のように伝統的に固定化した綴りも見られるが、多くの単語では、漢字音訳表記をできるだけ忠実に写そうとした綴りであることが見て取れる。

モンゴル語資料として「韃靼館雑字」を研究する際に、次の 2 つの点を確認しておくことは重要である。第 1 は、「韃靼館雑字」の漢字音訳は甲種本の漢字音訳方式を下敷きにして、それを簡略化したものであるという点である。「韃靼館雑字」の漢字音訳表記を扱う際には、それが由来するところの甲種本の漢字音訳表記に立ち戻ることによって、当時のモンゴル語の発音表記として格段に精度を高めることができる。第 2 は、「韃靼館雑字」のモンゴル文語の綴りには、多くの単語で「簡略化された」漢字音訳表記を忠実に写そうとした傾向が強く認められるという点である。おそらく、「韃靼館雑字」のモンゴル文字を綴った編者にとって、甲種本の音訳表記は意識されておらず、乙種本の漢字音訳表記をそのままモンゴル文字に写したと思われる表記が少なくない。

本稿では、甲種本で区別されていたモンゴル語の音の違いが「韃靼館雑字」の漢字音訳で区別されなくなったことによって混同され、モンゴル文字で間違って綴られた単語の実例を見た。もともと漢字音で区別されない発音の違いをモンゴル文字で表記する際に混同した誤記も存在する。「韃靼館雑字」のモンゴル文語の中で、漢字音訳表記の特性と制限に起因すると考えられる誤記をタイプ別に提示し、原典批判の一例としたものである。

最後に指摘しておきたいのは、「韃靼館雑字」のモンゴル文語語彙の中で、本稿で取り上げた問題のある表記は全体の 5 パーセントに満たないことである。今後の研究によって、これ以外にも問題のある綴りや誤記が明らかになることは十分に考えられるが、それにも拘らず、それは見方を変えれば残りの 9 割方の単語は問題無い表記と認められる可能性があることに通じる。「韃靼館雑字」のモンゴル文語資料の質的な評価はこのような原典批判の研究を経ることによってより確かなものになると思われる。

参考文献

Haenisch, Erich (1957) *SINOMONGOLISCHE GLOSSARE. I. Das Hua-I ih-yü*. Berlin: Akademie-Verlag.

栗林 均（Kuribayashi, Hitoshi）（1997）「モンゴル語古訳本『孝経』における正書法上の一特徴」『論文与紀念文集』呼和浩特：内蒙古大学出版社，264–278 頁。

栗林 均（Kuribayashi, Hitoshi）（2014）『孝経―モンゴル語古訳本―』仙台：東北大学東北アジア研究センター。

栗林 均（Kuribayashi, Hitoshi）（2019）『華夷訳語（甲種本）の研究』京都：松香堂書店。

《蒙汉词典（增订本）》（Menghan cidian）（1999）内蒙古大学蒙古学研究院蒙古语文研究所编写．呼和浩特 : 内蒙古大学出版社.

孙 竹（Sun Zhu）主编（1990）《蒙古语族语言词典》西宁 : 青海人民出版社。

Tumurtogoo, D. (2006) *Mongolian Monuments in Uighur-Mongolian Script (XIII-XVI Centuries) Introduction, Transcription and Bibliography*. Taipei: Institute of Linguistics, Academia Sinica.

テキストの影印（公刊・公開されている乙種本「華夷訳語」の「韃靼館雑字」）

ベルリン国立図書館所蔵本（B 本）：同図書館のホームページ（2020.12.12 閲覧）
http://resolver.staatsbibliothek-berlin.de/SBB000103AF00000000

中国国家図書館所蔵本（C 本）：『北京圖書館古籍珍本叢刊　6　經部　華夷譯語・高昌館課・回回館雑字・譯語・百譯館譯語・暹羅館譯語・八館館考』北京：書目文獻出版社、刊行年不明、1–58 頁。

東洋文庫所蔵本（T 本）：「韃靼譯語」『遼金元語文僅存録　第五冊　至元譯語、韃靼譯語、盧龍塞略譯語、登壇必究譯語、武備志譯語　附録武備志北虜考譯語（與登壇必究譯語同）』台北：台聯國風出版社、1974 年、35–93 頁。

SUMMARY

The first *Hua-yi yi-yu* (華夷訳語), published in 1389, consists of a Sino-Mongolian vocabulary and a collection of official documents with their Mongolian translations. The second *Hua-yi yi-yu*, compiled by the diplomatic bureau in the Yong-le（永楽）era of the Ming dynasty, contains vocabularies and diplomatic documents of a dozen of languages. Among them, the *Sino-Mongolian vocabulary* (韃靼館雑字) has as many as 845 items, common to those of the first *Hua-yi yi-yu*. Every Chinese entry word of the vocabulary is attached with two kinds of

Mongolian translations: the one is represented by Chinese characters denoting Mongolian pronunciation of the word, and the other is spelled by means of the Uighur-Mongolian script. It is quite a rare material of written Mongolian, dating probably from the early 15th century, with phonetic transcriptions in Chinese characters.

The aim of this article is to investigate features of written Mongolian in the *Sino-Mongolian vocabulary*. The shape of the Uighur-Mongolian script shows a typical example of the preclassical written Mongolian, as can be observed in the 13th and 14th centuries. Most of the spelling of written Mongolian words coincide the phonetic representation of Chinese characters besides some conventional spelling such as *tngri*. There are sufficient grounds on which written Mongolian words were spelled in accordance with Chinese transcriptions. There exist a series of errors in spelling of written Mongolian, caused by the ambiguity of phonetic representations of Chinese characters, which were unable to distinguish the phonetic differences in Mongolian. In this article, some types of errors in spelling have been indicated and classified so that the material can be properly evaluated and utilized in the study of the history of the written Mongolian language.